

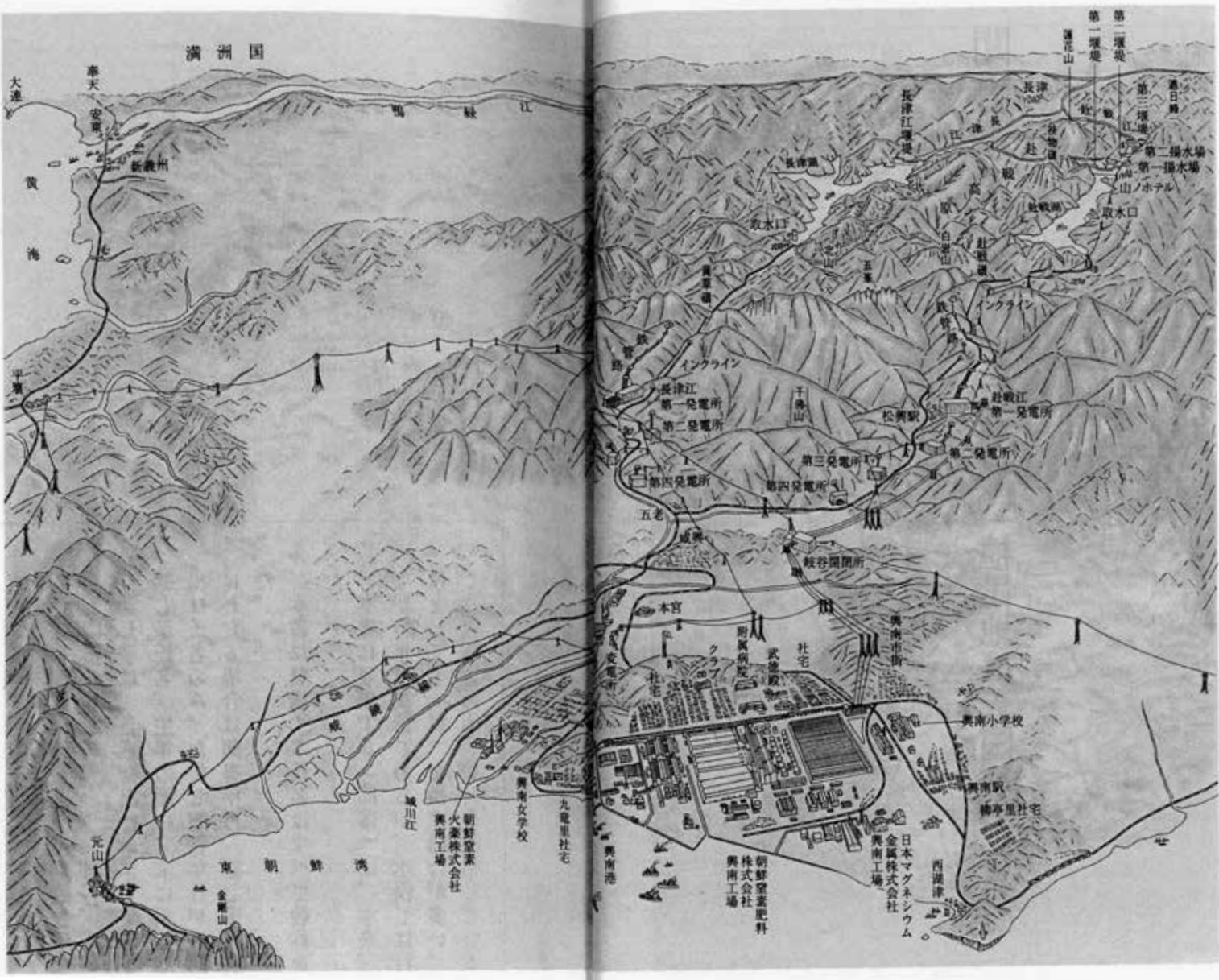
2022年10月20日

第21期水俣学講義

5回 「チッソ」と歩んだ我一族

はじめに 自己紹介

講義の依頼は、チッソのあった、滋賀県守山市のことであったが、戦前、現在の北朝鮮の興南工場からの、チッソとの関わりがありそこからの一族の流れを伝えます。以下の資料は、日本チッソの朝鮮事業絵図と年表です。話しの中で藤本家の歩みを重ねて行きます



日本窒素肥料朝鮮事業絵図

(「日本窒素肥料事業大観」昭和十二年より作図)

北朝鮮における 日本窒素の歩み

- 1926年（大15年） 日窒、朝鮮水電(株)会社設立、社長 野口遵 で設立
 - 1927年（昭2年） 日窒、朝鮮肥料(株)会社設立
 - 1929年（昭4年） 興南工場 一基、2基工事終了 送電開始
 - 1931年（昭6年） 興南邑制が施行され、野口遵初代邑長
 - 1932年（昭7年） 永安工場、油脂工場完成
 - 1933年（昭8年） 総督府に長津江水利用と電気事業経営許可を申請
 - 1934年（昭9年） 朝鮮送電(株)会社設立 日本マグネシウム金属(株)会社
 - 1935年（昭19年） 朝鮮石灰工業、大豆化学工業、火薬株式会社設立
 - 1936年（昭11年） ソーダ灰工場、アルミニウム工場、大豆調味料工場
 - 朝鮮石灰工業、灰岩工場建設、本宮カーバイト 石灰窒素工場完成
 - 1937年（昭12年） 朝鮮及び満州鴨緑江水力発電(株)会社設立
 - 興南邑 人口 6万人 日中戦争始まる
 - 1938年（昭13年） 海軍航空燃料イソオクタン製造工場着手
 - 1939年（昭14年） 満州国帝国燃料、吉林人造石油(株)会社
 - 1942年（昭17年） 日窒ゴム興行 興南 日本人人口 29214人
 - 1944年（昭19年） 野口遵 ロケット燃料NZ工事に着手
 - 1945年（昭20年） ソ連軍興南に進駐 興南諸工場接収
 - 日本人従業員入場禁止 朝鮮人労働組合の管理に移行
 - 武器供出命令 工場幹部拘束 社宅移転命令
 - 興南終結の避難民、約 9800名 発疹チブス猛威
 - ソ連軍日本人伝染病院の開設を命令 日本人技術者顧問として就労 その他あわせ、2490名就労
 - 興南食糧配給 1日 米0.8合 雑穀 0.66合
 - 1946年（昭21年） 闇船により興南脱出 徒歩による脱出始まる
 - 南朝鮮にコレラ発生、防疫のため、日本人南下禁止命令
 - ソ連軍、北朝鮮の日本人の正式引き揚げを発表
- 戦後、日窒から派生した企業**
- 1946年 積水化学（プラスチック総合加工メーカー）
 - 日本工営 水力発電所 ダムなどの開発や電力施設の政策
 - 改修
 - 1947年 旭化成（石油化学 建材 合成繊維 食品 医薬品など多角的）
 - 1973年 センコー（自動車運送事業 海上、鉄道輸送 倉庫など）
 - 1943年 マツダ、自動車
- その他 戦前からのつきあい、シンエツ 西松建設など



昭和12年頃 興南本町の或るカフェーでのクラス会
中列右より3番目が著者（同級生古沢太郎氏の写真提供）



昭和7年 尋常興南小学校 5年生時代

戦後の一族の歩みと私自身の歩み

- 1947年頃 藤本家は鹿児島県出水市米ノ津に引き揚げ
- 引き揚げ者の仕事として、ダム建設へ、五木のダムに
- 1950年頃 米ノ津で、叔父は電気工事店、叔母は映画館 うどん屋
パチンコ店 風呂屋などを経営
- 1951年頃 叔父は、京都にあった積水ハウスの関係で、薩摩電気を
- 1956年 チッソが旧滋賀県野洲市守山町と設立契約を結ぶ
- 1958年頃 滋賀県守山市の「窒素」会社の前に、叔父が、日本電興（株）
電気工事、機械を扱う会社設立（従業員 50名程
本人、一家で守山市、勝部町に移住。
- 1960年 工場近くの川田町に引っ越す 水俣、出水の働き手と同居
一族は、この工場前で、当初、食堂、その後、積水ハウス
関連の仕事も行う。守山は、南九州などから、移住してくる
人が多く、チッソの社宅に友人がいた。高校のときは、
チッソの道場で剣道をしていた。
- 1966年 旭チッソアセテートを設立 その後チッソは撤退する
- 1971年 守山の河西小学校、守山中学校、守山高校卒業 花園大学入学
- 1972年 「花園大学水俣病を考える会」をつくる。
- 同時に、琵琶湖の環境問題にもかかわる。
- 1973年 水俣病第一次訴訟判決
- 「青年の主張」滋賀県大会 最優秀賞 琵琶湖の環境問題
- 1973年 花園大学卒業論文に「石牟礼道子論」
- 1975年 滋賀女子高等学校で国語の非常勤講師
- 1976年 水俣病センター相思社へ 以後未認定運動に携わる
- 1977年 結婚 守山の親戚が祝いにくる
- 1983年 ガイアみなまた職員
- 1990年 水俣病総合医療事業開始
- 1992年 海鳥社より、「水俣海の樹」出版
- 2003年 水俣市議会議員当選（現在、4期目）

守山市には、兄と従兄が、藤本電気商会を経営
事務所の前には、（JNC守山工場）がある。



著者の還暦祝い 兄弟・子供・孫に囲まれて



なぜ、ここ水俣にいいのか、それは、不知火海の島々から、チツソを追って出て行った人があったこと。この地は、水俣病で苦しんだからこそ、出て行った人たちにとっても、かけがえのない、故郷で。あるだろう。

私は、幼い時から、チツソという大きな会社に庇護され、生きてきた。それだからこそ、みえるものも少し違うような気がする。言い換えると、加害の立場により近かったため、朝鮮チツソが、朝鮮を、国家的なプロジェクトと呼応しながら。化学産業を推し進めてきたこと、朝鮮の人たちの犠牲の上で、そして、日本の他国への侵略に加担したことは、これは、事実であり、チツソに関わるものとして、日本人として、猛省しなければならぬ。ならなかったが、

残念ながら、戦後、被害が顕著になった「水俣病」の被害は。戦争をくぐる抜けた、不知火海一帯の人々に、また、犠牲を強いることとなった。

そんななかでも、私の一族や人々は、やはり、たくましく、生きてきたのではないかと思っている。この事件から、かけがえのない「いのち」の重みを感じ、様々な環境問題に関わってきた親戚もいる。

、現存する「JNC水俣」には、深い相克と、かすかな期待もある。しっかりと、水俣病の被害者に向きあって欲しい。金銭の話だけではなく、そこからしか、真の共生はあり得ないと考えている。